

2025-2026 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 12月

作成者：伊藤桜羽

作成日：2025年1月5日

12月に入り、こちらフィンドレーでは雪が積もる日が増え、冬の景色がすっかり日常になっていました。12月12日からは冬休みに入り、日本より少し早く学期が終わりました。葉を落とした木々の間を歩きながら今学期を振り返る中、今学期で帰国してしまう友人もおり、「このメンバーで過ごすのはこれで最後かもしれない」という寂しさを感じました。日本は年末・年始に向けてお忙しい時期かと思いますが、皆さまお変わりなくお過ごしでしょうか。こちらでの12月の学びや生活について、少しでも様子が伝わればと思い、以下にご報告いたします。

【学習面】

English for Specific Purposes 最終プレゼンテーション

12月には、English for Specific Purposes の授業において、学期末の最終プレゼンテーションを実施いたしました。私は「Finding My Ikigai – A Journey Across Cultures, Music, and Identity」というテーマで、自分の生きがいをどのように見つめてきたのかを、これまでの経験と留学生活を通して整理しながら発表いたしました。プレゼンテーションの前半では、日本文化に根づく「Ikigai（生きがい）」という概念を紹介し、その背景にある価値観や、日本人が日常の中で大切にしている感覚について説明しました。特に、Ikigai が「好きなこと」「得意なこと」「社会に役立つこと」「必要とされること」の重なりとして語られることに触れ、これを自分自身の経験にどのように当てはめられるかを考察する形で話を進めました。

また、自分のこれまでの生活を振り返り、特に「音楽との関わり」について述べました。私は専門的な音楽活動を行ってきたわけではありませんが、歌うことや踊ることが好きで、気づけばいつも音楽が身近にある生活を送っていました。落ち込んだときに気持ちを支えてくれたり、前向きな気持ちに切り替えるきっかけになったりと、音楽は私にとって自然と寄り添ってくれる存在でした。こうした日常的な関わりを通して、「自分が心から落ち着けるもの」や「気持ちが軽くなる瞬間」がどこにあるのかを考え、それが私の Ikigai の一部になっていることに気づいた過程を紹介しました。プレゼンの中盤では、留学生活での経験について触れました。アメリカで生活する中で、日本の文化や価値観について説明する機会が増え、自分が当たり前だと思っていたことを言葉にして伝える難しさを実感しました。例えば、日本の礼儀作法や家族観、学校生活の特徴などを質問されるたびに、自分の文化を客観的に捉え直す必要性を感じました。こうした経験を通して、「自分は何を大切にしているのか」「どのような場面で自分らしさを發揮できるのか」を改めて考えるようになり、Ikigai というテーマがより身近なものとして感じられるようになりました。

準備段階では、授業で学んだ「分かりやすい構成づくり」や「相手に伝わる説明の工夫」

を意識しながらスライドを作成しました。特に、文化的な概念を説明する際には、専門的な言葉を使いすぎず、例を挙げながら丁寧に説明することを心がけました。また、スライドのデザインもシンプルにまとめ、内容が伝わりやすいように調整しました。発表当日は緊張しましたが、クラスの皆さんのが興味を持って聞いてくださっている様子が伝わり、落ち着いて話すことができました。発表後には先生から「今まででいちばん良いプレゼンテーションだった」と評価していただき、自分の努力が形になったことを実感いたしました。この言葉は大きな励みとなり、今後の学びに向けての自信にもつながりました。今回のプレゼンテーションを通して、英語で自分の考えを整理し、相手に伝える力が向上しただけでなく、自分自身の価値観や生き方について深く考える機会にもなりました。今後の学習や将来の進路を考えるうえでも、非常に意義のある経験となりました。

【生活面】

12月12日から冬休みに入り、日本の大学よりも一足早く学期が終わりました。キャンパスの木々はすでに葉を落とし、雪が積もった歩道を歩きながら、「本当に今学期が終わるのだな」と静かに実感する日々でした。同時に、今学期で帰国してしまう友人もおり、「このメンバーで過ごせるのは最後なのかもしれない」という寂しさも少しづつ現実味を帯びてきました。

Toledo Museum of Art

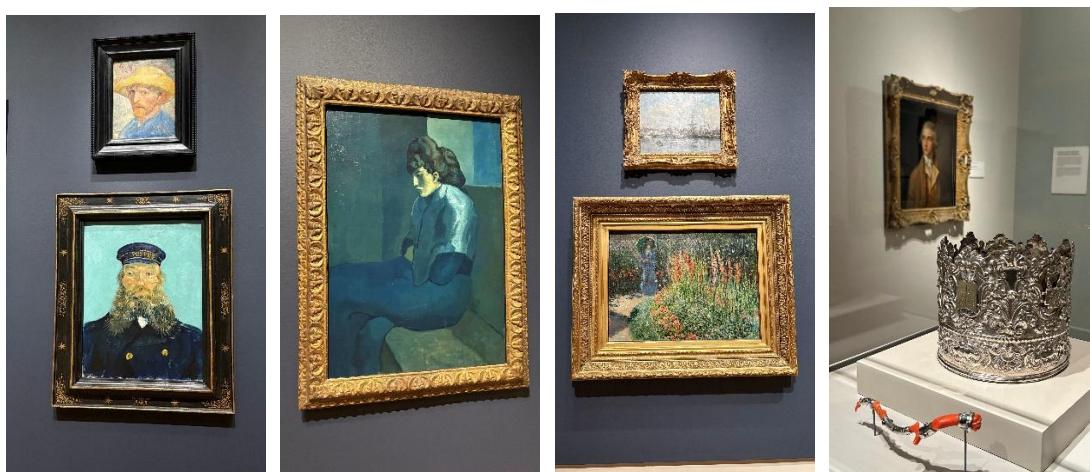
今学期で帰国してしまう友人がいたこともあり、「最後にみんなで思い出を作りたい」と私から提案し、授業のクラスメイトと教授と一緒に Toledo Museum of Art(トレド美術館)を訪れました。フィンドレーから車で1時間ほどの場所にある美術館で、到着するとまずその建物の美しさに驚かされました。白い大理石のような外壁と大きな柱が並ぶクラシックな外観で、まるでヨーロッパの宮殿のような雰囲気があり、入口へ向かうだけで少し背筋が伸びるような気持ちになりました。

Toledo Museum of Art は、1901年に地元のガラス産業で成功した実業家 エドワード・ドラメルによって創設された、120年以上の歴史を持つ美術館です。アメリカの地方都市にある美術館としては珍しく、創設当初から「地域の人々に芸術を開く」という理念を大切にしてきた場所です。トレド美術館は長い年月をかけてコレクションを増やし、現在では3万点以上の作品を所蔵していると言われています。古代エジプトの彫刻、ギリシャ・ローマの壺、アジアの陶磁器、ヨーロッパの宗教画、アメリカの現代アートまで、幅広い時代と地域の作品が集まっており、地方都市の美術館とは思えないほど充実ぶりです。日本文化に関するブースもあり、能と狂言、茶道などが紹介されていました。

ここで特に有名なのが、ガラス工芸のコレクションです。トレドは「アメリカのガラスの都」と呼ばれるほどガラス産業が盛んな地域で、その歴史を背景に、世界的にも評価の高い

ガラス作品が集められています。敷地内にある Glass Pavilion (ガラスパビリオン) は、建築そのものがアート作品のような美しさで、透明なガラスの壁が光を取り込み、展示されているガラス作品が時間帯によって違う表情を見せるのが印象的でした。

また、トレド美術館は「本物の名画が見られる美術館」としても知られており、ゴッホ、モネ、ピカソ、ルノワール、レンブラントなど、世界的巨匠の作品が常設展示されています。地方の美術館でこれほどの名画を間近で見られる場所は珍しく、アメリカ国内でも「質の高い美術館」としてたびたび紹介されるほどです。展示室に入った瞬間、教科書でしか見たことのなかった名画が目の前に現れたときの衝撃は忘れられません。ゴッホの筆の跡、モネの光の揺らぎ、ピカソの大胆な構図など、どれも写真では絶対に伝わらない迫力があり、作品の前に立つだけで胸が震えるような体験でした。



バースデーパーティー

12月は偶然にも誕生日の友人が多く、クリスマス間近だったこともあり、ほとんど毎週のようにパーティーが開かれました。部屋に飾り付けをしたり、手作りケーキを用意したり、夜遅くまでボードゲームやおしゃべりを楽しんだりと、寒さの厳しい季節でありながら、人とのつながりを強く感じる時間がたくさんありました。

特に、日頃から大変お世話になっている先輩の誕生日には、「今までの感謝を何か形にしたい」と思い、サプライズを計画しました。その先輩と関わりのある友人たちに協力をお願いし、一人ひとりからビデオメッセージを集めました。日本語で話してくれる人、拙い日本語に挑戦してくれる人、英語で思い出を振り返ってくれる人、母国語で祝う他国からの留学生たちなど、メッセージの形はさまざまでしたが、それぞれに感謝や温かさが詰まっていました。集めた動画を編集し、歌の歌詞と重ねて一本の歌詞動画にまとめ、パーティーの終盤でこっそり流しました。画面に知っている顔が次々と映し出されるたびに、先輩が驚いた表情を見せ、最後には目を潤ませながら「本当にありがとう」と何度も言ってくれました。その姿を見て、私自身も胸がいっぱいになり、「人のために時間と気持ちを使うことの嬉しさ」を改めて感じました。



Wildlights at Columbus Zoo

12月の思い出の中でも特に印象に残っているのが、Columbus Zoo and Aquarium（コロンバス動物園）のイルミネーションを見に行った日のことです。Columbus Zooは、1927年に開園したアメリカでも歴史ある動物園のひとつで、長い年月をかけて地域の人々に愛され続けてきました。開園当初は小さな動物園だったそうですが、地元の支援や寄付、そして動物保護活動の広がりとともに規模を拡大し、現在では約580エーカー（東京ドーム約50個分）という広大な敷地を持つ、全米でもトップクラスの動物園へと成長しています。園内には600種以上・1万匹以上の動物が暮らしており、北米の動物園の中でも特に展示の質が高いことで知られています。動物たちの生息環境をできるだけ自然に近づける工夫がされていて、ただ動物を見るだけでなく、その動物がどんな環境で生きているのかを体感できるように設計されています。エリアは「アフリカ」「アジア」「北極圏」「北米」「オーストラリア」など地域ごとに分かれており、歩いているだけで世界を旅しているような気分になれるのも魅力のひとつです。

特に冬の時期に開催される“Wildlights（ワイルドライツ）”は、1988年に始まった伝統的なイルミネーションイベントで、今ではオハイオ州の冬の風物詩として定着しています。毎年100万個以上のライトが園内全体に飾られ、動物園というよりも、まるで光のテーマパークのような雰囲気になります。動物をかたどったライトアップや、音楽に合わせて色が変わるショー、光のトンネルなど、アメリカらしいスケールの大きさに圧倒されました。私が訪れた日も、入口のゲートをくぐった瞬間から、目の前に広がる光の海に思わず息をのみました。木々には無数のライトが巻きつけられ、遠くの方まで続く光の道がキラキラと輝いていました。寒さは厳しく、手袋をしていても指先が冷たくなるほどでしたが、光に包まれた園内を歩いていると、冬の冷たささえもどこか心地よく感じられました。園内を進むと、動物の形をしたライトアップが次々と現れ、まるで光の動物たちが夜の園内を歩き回っているようでした。特に印象に残っているのは、巨大なキリンのライトと、湖の上に浮かぶように設置された青い光のイルカたちです。動物園ならではのイルミネーションで、ただのライトアップではなく、「動物園だからこそできる表現」が随所にありました。途中で友人たちとホットチョコレートを買い、湯気の立つカップを手にしながら光のトンネルをくぐりました。日本のイルミネーションは街中やテーマパークで見ることが多いですが、動物園全体が光に包まれるという体験は新鮮で、「アメリカの冬の楽しみ方ってこういう感じなんだ」

と実感しました。



Christmas break

12月20日から28日までは、キャンパス内で同じハウスに住んでいる友人Evaのご実家に滞在させていただきました。普段から何かと気にかけてくれる存在で、「冬休みの一部をうちで過ごさない?」と声をかけてもらったことがきっかけでした。アメリカで過ごす初めてのクリスマスを、友人の家族と共に迎えることができるというのは、留学生としてとても貴重な機会だと感じました。Evaの家は、郊外の静かな住宅街にあり、夜になると近所の家々のクリスマスライトが一斉に輝いていました。家の中には大きなクリスマツリーが飾られており、オーナメントの一つひとつに家族の思い出が込められていると聞いて、とても温かい気持ちになりました。Evaには弟が三人おり、毎日のようにちょっとした兄弟げんかが起こるにぎやかな家庭でしたが、その姿もどこか微笑ましく感じました。食卓を囲むときには、学校のことやスポーツの話、ちょっとした冗談などが飛び交い、日本の家族団らんとはまた違った「アメリカの家庭の空気」を感じることができました。

クリスマスイブには、母方の親戚が約30人集まりました。近所の教会を貸し切ってパーティーを行い、大きなテーブルがいくつも並べられ、手作りの料理やデザートがぎっしりと並んでいました。いとこたちは私と同年代の人が多く、「日本ではクリスマスはどうやって過ごすの?」「お正月ってどんな感じ?」とたくさん質問してくれました。私のつたない英語にも根気強く耳を傾けてくれ、「日本にも行ってみたい」と言ってくれたのが嬉しかったです。最初は、親戚の集まりというごく個人的な空間に自分が入っていても良いのだろうかという不安がありました。Evaがそばでさりげなくフォローしてくれたり、親戚の方々が「あなたも家族だからね」と言ってくれたりしたことで、少しずつ心がほぐれていきました。

クリスマス当日は、今度は父方の親戚が約20人集まりました。日本では、親戚がここまで大人数で集まるのは主にお正月のイメージが強いですが、アメリカではクリスマスがその

役割を担っているのだと、実際に体験してよく分かりました。「日本とアメリカでは、クリスマスとお正月の位置づけがちょうど反対なのかもしれない」と感じると同時に、どちらの国でも「年に一度、家族が集まる日」がとても大切にされていることに共通点を見出しました。

親戚の集まりでは、ゲームをしたり、クイズをしたり、カードゲームで盛り上がったりと、言葉を使う場面も多くありました。最初は、英語の語彙の少なさや発音への不安から、「聞いているだけの方がいいかもしない」と一歩引いてしまいそうになる自分もいました。しかし、家族の皆さんには、私が言葉に詰まても最後まで待ってくれたり、言い直したいときに優しく助け船を出してくれたりしました。「間違えても大丈夫だよ」「あなたの話をもっと聞きたい」といった雰囲気が自然とそこにあり、そのおかげで次第に「間違えたら恥ずかしい」という気持ちより、「一緒に楽しみたい」という思いが強くなっていきました。気がつくと、私はゲームのルールを説明していたり、自分から冗談を言って笑い合っていたりして、最初に感じていた不安はすっかり薄れていきました。



Christmas Presents

最も驚いたのは、クリスマス当日のプレゼントの光景です。朝早く、弟たちに「起きて！ プрезентを開封するよ！」とたたき起こされ、まだ眠い目をこすりながらリビングへ向かうと、大きなクリスマツリーの下に山のようなプレゼントが積まれていました。映画でしか見たことがないような光景に、一瞬、目の前の景色を信じられませんでした。一人につき30個以上のプレゼントが用意されており、まさかのことに、私の名前が書かれた包みも30個ほど並んでいました。家族全員がツリーの周りに座り、両親が「これはあなたに」「これは次ね」と順番に手渡していきます。包みを開けるたびに歓声が上がり、小さな子どもに戻ったかのように目を輝かせる家族の姿がとても印象的でした。私も一つひとつのプレゼントを開けながら、「ここまでしてもらって良いのだろうか」という戸惑いと、「本当に歓迎してくれているのだ」という嬉しさが入り混じった、何とも言えない気持ちになりました。特に心に残ったのは、Eva のご両親が、私との日々の何気ない会話をよく覚えていてくださったことです。「アメリカのこういうお菓子が気になっている」「こういう文房具が好き」「寒

い日のために、もう少しあたたかいものを用意しなければ」そうした小さな一言を拾ってくださり、それぞれに合ったプレゼントを選んでくださっていました。その心遣いに触れ、「私はただの留学生ではなく、本当に家族の一員として接してもらっているのだ」と強く感じました。また、親戚の方々もあらかじめ Eva から情報収集をし、私宛のプレゼントを用意してくださっていて、すごく有難く思いました。出会ったばかりではありましたが、こんなに素敵な人たちとクリスマスを共に過ごせたことをとても幸せに思います。



ホームステイ最終日には私にお別れを言うために近くに住むいとこや祖父母が駆けつけてくださいました。素敵な経験と思い出のお返しがしたいと思い、前日に Eva に手伝ってもらい、家族各々へのプレゼントを用意しました。気持ちを込めて書いた手紙もプレゼントもそれぞれに涙を流して喜んでもらえて嬉しかったです。また、どの方も「また週末でもいいつでも来てね。連絡を取りたいから連絡先を交換しよう」と別れを惜しんでくださり、私もまたすぐに会いたいと思いました。

この 8 日間は、アメリカのクリスマス文化や家族の過ごし方を深く知るだけでなく、人の温かさに何度も触れる時間でした。留学生として「特別扱い」されるのではなく、一人の親戚のように自然に受け入れてもらえたことは、私の中で大きな自信と安心感につながりました。フィンドレーでの留学生活の中でも、このクリスマスの経験は、間違いなく忘れられない大切な思い出となりました。

以上のように、12 月は冬休みの始まりとともに、学びの面でも生活の面でも、これまでの経験が一つひとつ積み重なっていくのを実感できた月でした。授業では、学期の締めくくりとして取り組んだプレゼンテーションやクラス活動を通して、自分の考えを英語で伝える力が少しづつ確かに育っていることを感じました。また、生活面では、友人やその家族との交流を通して、言葉や文化の違いを越えて人とつながる温かさに何度も触れ、留学生活の意味を改めて考える時間になりました。特に、今学期で帰国する友人との別れや、アメリカの家庭で過ごしたクリスマスの経験は、嬉しさと寂しさが入り混じる中で、自分がこの土地

でどれほど多くの人に支えられてきたのかを深く感じさせてくれました。こうした出会いや学びは、教室だけでは得られない、私にとってかけがえのない財産です。

残りの留学生活でも、一つひとつの経験を大切にしながら、ここで得た気づきや成長を次につなげていきたいと思います。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu